



たいしも通信

このたび山口県隊友会のHPで下関支部「たいしも通信」のページ(タグ)を作成、さらに平成4年8月号から現在までのバックナンバーも掲載していただくこととなり、感謝いたしますとともに、今後もより一層支部活動に邁進してまいります。

さて、下関戦跡シリーズ11回目となる今回は吉田についてです。今回もかなり広義(!?)の戦跡ということになりますので予めご了承ください。

下関市東端の吉田周辺は、歴史上多くのイベントが発生した関門海峡周辺の市西部とは異なり、少々寂しくさえ感じられる場所です。しかしここは吉田宰判という重要な位置づけがなされています。なぜこのような場所が?と思われた方も多いと思います。基本的事項から順を追って説明してまいります。

◆国と藩

下関市は平成17年の4町合併以降、山口県西端の南北を占めています。明治維新以前というと、長門国と周防国の一部が該当します。長門国とは下関市を含む、大まかに言うとも北西半分が、周防国とは大まかに言うとも南東半分が該当します。ここで言う「国」とは7世紀頃に制定された地方行政区分です。

これに対して「藩」はよく耳にする呼称ですが、本来は周の皇帝が配下の諸侯を呼称していたものを、元禄時代の儒学者が徳川配下の大名に当てはめたもので、呼称としてはあつたものの、当時は一般的ではなかったようです。実際、幕府も藩ではなく領と呼称していました。現在の山口県は、徳川幕府の時代だと萩領(後に山口領)が大部分で、あとは東から岩国領、下松領(後に徳山領)、新田領(後に清末領)、長府領(後に府中領)といった具合です。制度上は明治になってから定められ、その時点で現在の山

口県は大部分が山口藩となり、あとは東から岩国藩、徳山藩(後に山口藩)、清末藩、豊浦藩となりました。廃藩置県はその後の明治4年になります。下関と言えば長州藩というのが広く普及していますが、実際には複数の支藩の集合体であるこの呼称はごく短期間であつたようです。

◆吉田宰判

宰判とは萩藩における郷村の支配をする統治区域の単位のことです。後の裁判という言葉の由来にもなります。周防国に10区域、長門国に8区域あり、そのうちの一つが吉田に置かれました。これが吉田宰判です。

吉田宰判は萩藩(毛利本藩)の所領であり、隣接する支藩の長府藩、清末藩とは異なり、本藩から代官が直々に派遣される行政機関でした。代官が所在する場所は勘場(他藩では代官所)と呼ばれ、管轄地の税や土木工事、治安維持などが主な業務でした。

吉田宰判勘場は現在の吉田小学校の北側一帯に築かれており、隣接してお茶屋もあつたそうです。現在は北の細い道路に面して石垣と土塀の一部が残り、案内板が設置されています。一段小高くなつた敷地には草が生い茂っており、南側にも土塀が残っているとされています。

▼編集後記▲

某放送局の大河ドラマで、吉田松陰が「自分は長州藩の…」と言うくだりがあり、彼が活躍した頃はまだ長州藩はないはずで、「長州にある藩…」ならわかるが、という意見を聞きました。これも含め、情報の流れは以前はフロー(流れ)だったのが、今後はストック(蓄積)になるという意見もありました。他山の石として自分も肝に銘じなければ、と強く感じた次第です。

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。